

田中隆尙撰集

第七卷

田中隆尙撰集 第七卷

平成十八年七月十五日印刷
平成十八年七月二十五日發行

著 者 田 中 隆 尙

發行者 唐 澤 明 義

發行所 展 望 社

郵便番號一―二二・〇〇〇二

東京都文京區小石川三・一・七

エコービル二〇二

電 話 〇三(三八一四)一九九七

FAX 〇三(三八一四)三〇六三

振替〇〇一八〇・三・三九六二四八

印刷・壯光舎印刷／組版・エムツークリエイト

ISBN4-88546-152-9

隨筆四

目次

ささなみのおきな

ささなみのおきなと短歌……………七

ささなみのおきなの俳句……………七

ささなみのおきなの散文……………三

附録一

本庄の講演……………二六

附録二

高田漣五郎年譜……………一八

伊東月草年譜……………三六

あとがき

呉茂一先生

辻堂だより……………三七

ロオマだより……………三七三

イタリア招延……………四五〇

歸朝以後……………四八四

あとがき

編集覺書……………五九三

ささなみのおきな

ささなみのおきなと短歌

「ひげのはえたおぢいさんがみえました。けふは學生さんとふたりで」とか、「けふはひとりで」とかいって、女子事務員が知らせてきて、わたしはふたりを教官控室か研究室に適宜に請じて、おきなのいふことをきいた。それまでも何回か「高田さんのおとうさんがみえました」といつてきたが、それは年に一二回であつたし、それに高田悦臣といふ名がわたしの閻魔帳にのつてゐなかつたので、記憶にとまらなかつたのである。もう何年もまへに教育専攻の組を一度うけもち、そのあと醫學部のうけもちとなつたのに、まへの教育の殘留生一名がいつまでも籍だけわたしのうけもちとなつてゐて、しかもその落第の學科はわたしとは無縁のかなり數おほくの課目であつた。そこで「高田さんの父兄のかたがこられました」といはれても、咄嗟におもひだすことができなかった。女子事務員が説明の手間をはぶいて「ひげのはえたおぢいさん」とか、「ひげのおぢいさん」とかいつたのであつた。「辨當をもちてかよひくる父子ふたり聴講はせずかへりゆきたり」「假退院してきたりたる學生はいまだ教場にいづる意志なし」「學生をともしなひきたる父親のおきなのもてこし辨當をよばる」「わが部屋につねにつれだちてこしふたりけふは父ひとりきて辨當をくふ」は昭和三十九年の秋冬につくつた、

わたしの未發表の歌であるが、留年にも年限があり、規定の單位數をとらないと、卒業できないので、高田氏がなんとかして卒業させようとむりをして、まだ完全に治癒しない子息とつれだつて、わたしのところにきたのであつた。

そのまへ昭和三十八年四月に子息の在學年限延期のことで、高田氏は鶴沼の家まで相談にこられたが、そのときのことは高田氏が「『ももんが』回顧」と題して、「『ももんが』創刊二十周年記念特輯號」にかいてゐる。

「ももんが」と高田漣五郎との關係は私の倅が群馬大學學藝學部の學生であり、擔任の先生が田中隆尙助教教授であられ、倅の一事上のことで大變お世話になつたのが始まりであつた。先生に御相談したいことで鶴沼のお家をお尋ねした。驛を降りて踏切りを越え商店で聞いて、教へられた道順をたどり、玉石でつくられた石段をのぼつて立派な少し古色を帯びた玄關に立つて呼鈴をおした。しかしお答へがない。左手にまはつて行くと内玄關があつて、硝子戸に便箋紙に何か書いてはさんである。讀んで見ると、眼鏡めがねのをぢさんは居ないから、またあとで遊びあそませうとふりがながふつてあり、約束を斷る文面である。暫らく立つて居たが、表札が無いのに氣がついて、もしかしたら違つた家ではなかつたかと、教へてくれた商店まで戻り聞きただした。さつきのおかみさんは愛想よくその通りです、ちがつては居ないと云つてくれた。矢つぱりちがつては居なかつた。しかし誰も居ないやうだ。お留守では折角來たのにと、急いでもどつて再び坂をのほり玄關に近づくと、見覚えのある先生が今郵便局へ行つて來たと云はれ、玄關を開けて入つて行かれた。私もあとか

らついで、應接室の椅子に腰をかけ思ひ出すまに昔のことを口にした。昭和十三年頃長男が中學四年から五年のときに獨逸語の勉強を教へてくれた田中隆泰と云ふ人のことで、今日只今お會ひして居る田中隆尙先生、そして二十年前にお世話になつた長男の先生、姓がおなじで名が一字しかちがはないと何か不思議な思ひで云つた。すると先生はおどろいて「隆泰は僕の兄です」と云はれると、二階から本をもつて降りて來られて、この中に書いてあるから讀めとその本を下さつた。これは「茂吉隨聞」上下と別卷の三冊である。あまりのことにびつくりし、事實は小説より奇なりと云ふがほんたうだと思つた。そして倅と先生のきづなが切れる時が來た。「いろいろ御心配を頂いた先生にお別れするのが惜しまれてなりません」と申し上げると、かつて私が歌俳諧に興味を持つて居ることを話したことがあつたので、歌を作つて持つて來れば見てやると云はれた。指定された日に持參すると、暫く見て居られたが、讀み終つて格調が高いから私の雜誌にのせてやると云はれた。その時以來十三年後の今日までその御縁はつづいて居る。もちろん添削選歌をして頂いてのこと。

これはそのとほりであるが、註をつけくはへれば、内玄關に「眼鏡のをぢさんは居ない」と書いた便箋をはさんだのはわたしではなくて、下宿してゐた學生であつたらう。對坐ちゆうに高田氏が田中隆泰といふ人を知らないか、長男が獨逸協會中學の四年五年のときにドイツ語をならつた人だがといつたので、わたしはおどろいて、それはわたしの兄だといふと、高田氏も運命のつながりの數奇におどろいたのも高田氏のかいてゐるとほりである。高田氏はことばをつづけて、息子に數人で勉強に

こいといはれて、同級生何人かで、學校の授業以外に勉強をならひにゆき、一高をうけたが落ちた、また一年浪人してならつたが、隆泰先生は月謝はとられなかつた、息子が水戸高等學校にとほらなくて、慈恵にはいつたときに、高等學校にはいらなくちやだめだ、もう一年浪人して勉強しろといはれたが、經濟上の事情のためそのまま慈恵にやつてしまつたといつた。またなにがきつかけだつたか、高田、お前のおやぢは癩癩もちだといはれたが、自分は納得がいかなかつたといつた。高田氏に「茂吉隨聞」を進呈したのはそのためで、とくに五兄隆泰のことでゐる上巻と別巻をひろげてみせたのであつた。そのとき高田氏は歌にも關心をしめたので、「ももんが」も進呈して、歌をつくつてくれれば、みてあげようといつた。「茂吉隨聞」はそのころはまだ舊版の餘裕がいくらかあつたのだが、「いさごぢ」は一二冊しか餘分がなかつたので、これを進呈したのは、いよいよ高田氏が本格的につくりはじめたといふことを知つてからであつた。高田氏は「いさごぢ」のことを歌にしなかつたが、題材が鶏やたまごや生活に關するものがおほかつたので、とくに珍重してゐるといふことをあとでいつた。

山羊の乳

犬の運動に何氣なし來し堤には野燒の香りほのかに残る

わが蒲團を敷きてくれたる悦臣の今日のしぐさにかろき喜び

乳山羊をしばし放ちて若草に寝ころべば空に晝月淡く

山羊の乳を届けにゆかんと手に持ちて堤に上ればかはほり飛ぶも

南瓜苗移し植ゑたるこのゆふべ雲は大きく立ち初めにけり

草むしる人達呼びておやつ時芝生の上に車座つくる

青竹に挟まれし蛇の流れ去る濁りし水は量ましにけり

久々に籬かくる音の響き来る梅雨の晴れ間の暑き晝すぎ

刈る草に露を含みし重さありて鎌の切味殊によろしも

われに似しと聞きし時より會ひたくて孫を産院に見舞ふ梅雨晴れ

右の一連が高田氏が父兄といふ立場からはなれて、わたしをたづねてきてしめした最初の歌であり、はじめて活字になつて「ももんが」昭和四十年八月號にのつた歌である。高田氏は多作であつたから、この倍、あるいは三倍の歌を持參して、わたしがえらんだ結果がかうなつたのである。さてかうしてのこつた十首は、雑誌のくみかたから限定されたのだから、これらからもつときびしく選をすることもできる。いまかりに第一首「犬の運動に」、第三首「乳山羊を」、第五首「南瓜苗」、第七首「青竹に」、第九首「刈る草に」の五首をえらべば、單に初心者でないといふだけでなく、ひとつの完成の域に達したものであり、あとはいかにして深化し轉化せしめるかといふ問題しかのこつてゐない。高田氏がどうして最初から完成した歌をつくつたか、おそらくそれは戦前に角川源義らとともにまなんだ俳句の手法を應用したからだらう。高田氏自身あるとき第三者にむかつて、人の歌集をよんだからといつて自分のものになるわけではない、自分でかんがへなくてはだめだといつたことがあり、「茂吉先生は吾師の師なり短詩型にこの身たゆるまではげまざらめや」と詠んでも、それはひと

つの挨拶であり、どこまで齋藤茂吉歌集をよんだかうたがはしい。わたしの歌集では「いさごぢ」を秀歌だといつて珍重したが、「降雪」と「みづしも」とは挽歌のところに来て涙滂沱としてよみすむことができず本をとちたといつて絶句した。わたしの歌集以外では節、左千夫、赤彦などをよんでゐたが、それはむしろ題材が自分と共通してゐたためだつただらう。

十日夜

十日夜とをかんやの餅をもらひし分けまへを師にたてまつらんと多くとりけり

障子開けて掃く老妻は耳遠く顔見あはせど只に掃きをり

せはしけれどたぬしく覺めて稻仕事よつさう寄草よつさうつくり夜の明くる待つ

梅檀の葉は散りにつつ黄ばみ來し木の實あまたに現はれにけり

神酒神饌みきみけをささげまつるも簡略に地の神祭り今日をことほぐ

右は「ももんが」昭和四十一年四月號にのつた連作で前掲の「山羊の乳」から八ヶ月になるが、その間毎月十首あるいは二十首と發表してきて、そのなかにもとりあげるべき幾首がある。しかもとくにこの一連をぬいたのは、「十日夜」とか「寄草」とかいふ方言をたくみに歌のなかにとりいれてゐるからであり、高田氏自身二十五周年記念號で「十月十日に新米の餅をついて、あんころ餅をつくり、産の神さまや佛さまに供へて、收穫の感謝をし、夜新しい稻でとれた藁の一束ねを縄でしばり、子供たちが「十日んや、藁鐵砲、夕めし食つてぶつたたけ」と、聲をそろへていひながら、その一束で大地を叩きながら歩きまはるのである」とかいてゐる。「寄草」とは刈りとつた稻をはこぶために、

東にしてゆはへる一種の藁縄である。さて高田氏の歌は最初から前月までずっと三段組にくんでゐたのに、この「十日夜」は二段組をもへないで、いきなり上下ぬきの一段にくんである。元來「ももんが」の歌は田中隆寛、渡會浩、田中隆尙が中心になつて一段組で發表し、まだ年季をいれないものは二段と三段にとりあげるといふ慣習が確立してゐた。そこで高田氏の歌が三段組からいきなり一段にうつされたのは「ももんが」内におけるひとつの拔擢であつた。事實これらの歌は「山羊の乳」からさらに進展してゐるし、これまで八ヶ月の作をふりかへれば、あながち、すぎた措置といふこともできなかつた。しかしこれには事情があつた。すなはちこの年二月から四月までわたしはイタリアにいつてゐたため編輯代理かんちあんが初校時のあきの埋草として獨斷で吉澤國雄氏の「千曲河原」とともに上下ぬきの一段としてくんだのであつた。

わたしが歸國して編輯の立場にかへると、一應この編輯代理の拔擢をもとの三段組にかへし、「十日夜」の評などをみさだめたうへ、二ヶ月まをおいて七月號からふたたび一段に拔擢した。

雁來紅

掠の實の屋根打つ音のきびしさは過ぎ逝く秋をかなづることし

赤き實の美しかりし萬りやうを切りし幼なさを父は叱らず

水かれて久しくなりし壕川に下りて葦刈る寒きゆふべを

北風に宙に舞ひたる枯葉らは歸るがごとく遠ざかりゆく

葦もなく地にひろがりし蒲公英は一輪咲きて春を待ちをり

驛員もなき私鐵の驛に降り立ちて山の端のぼる月を見にけり

堤焼く猛き炎は夕焼の色より赤く風にうごめく

雁來紅の種ひろげ干す暮れ方の陽はつめたくて淡くさしをり

北風は今朝は凪ぎゐて樟の葉はもまれしあとの疲れを見せつ

釣り上げしつるべの水は月光にかがやき落ちて桶に溢るる

隣より菊ひと鉢を贈られて繪にかく心われに起きたり

これらは高田氏生涯の第三回目の秀作で、わたしは自信をもつて一段組に昇格せしめたのであつた。とくに第一首「掠の實の」、第四首「北風に」、第五首「莖もなく」、第九首「北風は」、第十首「釣り上げし」の歌などは高田氏の進展をまざまざとしめすもので、高田氏が生をとぢたいまとなつても一代の秀作である。作歌をはじめから一年そこそこでこのやうに自然の奥義をとらへた人は現歌壇はいふまでもなく、過去世にもいくたりもなかつたのではあるまいか。これらの歌のつた編輯後記にかんが「高田氏の歌は頓に進歩し、作歌數も壯者を凌ぐ。師たる編輯人の評言によれば歌壇の高名な或る人々などより數等上手で、歌の出來上る速さは目をみはるものがあり、而もそれらが殆ど體をなしてゐるのは眞に驚くべきことださうだ」とかいてゐるが、この感想はいまでもかはりが無い。高田氏の歌の一段組はこのときから昭和四十二年二月號までつづくのであり、このあひだが高田氏のもつとも得意のときであり、また意欲にもえたときではなかつたらうか。

雪の原月はつめたく照りはえて己が足音きざみ行くなる